令和５年度　一般選抜　小論文　出題の意図

問題文の出典：細谷功『見えないものを見る「抽象の目」　「具体の谷」からの脱出』、中央公論新社、2022 年、104～111 頁。

　限られた時間の中で、出題された長文を読み解きながら自ら思考し、それを論理的に表現できているかを問うものである。

１）設問の趣旨を的確に捉えているか。
２）課題の在所を把握し、適切に絞り込んでいるか。
３）具体例を関連させて説得力をもって論じているか。
４）文章を整然とまとめ上げているか。

※この「出題の意図」についての質問及び照会には、一切回答しません。

令和五年度　山形県立米沢女子短期大学

一般選抜　小論文　問題用紙

【問題】次の文章を読んで、以下の設問一、設問二に答えなさい。

設問一　筆者は抽象化をどのように考えているか、一八〇字以上、二〇〇字以内で要約しなさい。

設問二　あなたがこれまで経験したコミュニケーションギャップについて振り返り、どのように行えばよりよいコミュニケーションが可能であったと考えますか。筆者の考えを踏まえた上であなたの考えを六五〇字以上、七〇〇字以内で述べなさい。

ここではそもそも抽象化とはどういうことかを考えていきます。抽象化には様々な側面がありますが、そこには複数の事象を共通の特徴からまとめて一つに扱う、分類する、一般化する、関係を抜き出すといった要素があります。それらの一つ一つが、全て「線を引く」という行為によって成り立っていることを確認していきましょう。

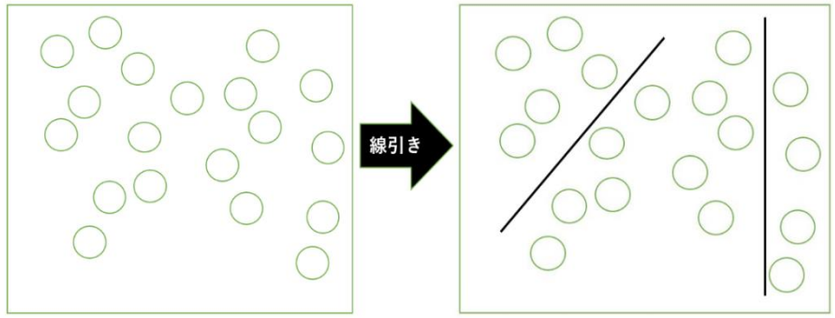
抽象化によって「線を引く」という行為は、大きく二通りに分けられます。一つ目は「何かと何かの間に境界線を引く」という意味での線を引くで、二つ目は「何かと何かとの間の関係づけをする」という意味での「線を引く」です。見えない世界とは、簡単に言えば具体的に目に見えるものの間に様々な抽象のレベルで見えない線を引いていることであるというのが、抽象概念のとらえ方です。それらを一つずつ説明していきましょう。

まず一つ目の線引きが、「区別」です。要は、二者の間に仕切りの線を入れるというイメージです。（中略）多数のものの間に線を引くのは、様々なものを「分類する」ことにつながっていきます。例えば、図中の「〇」の一つ一つを一人の人と考えれば、様々な仲間やグループを形成することを指します。これによって個人がまずは家族という最小単位となり、そこからさらに村や集落といったコミュニティが生まれ、やがてそれは国家という形で巨大化していきます。これも、全てどこかで線引きをしてその内外を異なる集団とみなす抽象化の発想によっています。

もちろんこのような線引きは、コミュニティのように（属しているかいないかの二択のように）必ずしも「白か黒か」で分かれるものではありませんが、これに規則や法律のようなものが加わってくると、明確な白か黒かという線引きが必要になってきます。

規則や法律という言葉が出てきましたが、このような様々な決まりごとは、「線を引くことによる区別」の典型例と言えます。規則や法律に違反しているかどうか、罰金を適用するのであれば罰金一万円相当なのか十万円相当なのか、そこには明確な線引きが存在しなければなりません。ルールには線引きが不可欠です。誰にでもわかるような客観的な基準、多くの場合ＹＥＳかＮＯか、あるいは数字で明確に区別することによって、法律や様々な規則が決められています。売上や収入が〇万円以上／未満（税率や補助金がもらえる・もらえない等の線引き）、スピードが□キロメートル以上／未満（スピード違反の線引き）といった形で、ルールのための線引きがなされます。

ここまでお話してきた「集団の形成」と「ルールの制定」というのは、私たちが社会生活を営む上で不可欠のものです。つまり裏を返せば、これらに共通する抽象化という考え方があるがゆえに、私たちは多数の成員による集団を作って社会生活を営むことができるというわけです。



【図】「区別」の線引き

もちろん多くの動物だって集団生活を営むことができますが、それはあくまでも目に見える範囲の成員数（群れの数）であったり、五感で感じることができるサイン（アリやハチ等）による行動指針によったりという、極めて具体的ものに依存する集団に限られています。そのため、人類のように世界規模で全く目に見えない、あるいは会ったこともない人たちとも同じルールを守る成員を構成するというような概念に至るのは難しいと言えます。

そのような区別の線引きという基本機能を応用した抽象化の最も基本的な側面が、複数の事象をまとめて一つと扱うことです。例えば、トマトやピーマン、人参などを「まとめて一つ」として「野菜」と抽象化するとか、犬、猫、牛などを「動物」とか「哺乳類」とまとめて一つにするといったことです。

これによって「野菜」や「動物」という、直接目に見えない分類の言葉＝概念を次から次へと生み出していくことが人間の持つ知的能力としての抽象化です。

このような「まとめて一つにする」ことで分類名（野菜や動物等）という目に見えない抽象の世界を生み出し、トマトやピーマン、犬や猫といった複数の対象物の間に共通の特徴を見出すことで、いちいち個別にではなくまとめて扱うことができるようになり、人間の知能は飛躍的に発達してきました。

（中略）

「動物」という分類をするためには、多くの地球上の生物を観察して「動物であるもの」と「動物でないもの」の線引きをし、その線の引き方の定義をすることになります。これは「昆虫」でも「ハ虫類」でも話は同じです。

さらに野菜や動物以外でも、あらゆる言葉の定義というのは同じ原理の上に成り立っていることがわかるでしょう。

「いちいち言葉を使う時に、一つ一つの言葉の厳密な定義なんか気にしていない」という人もいるかもしれませんが、結果として私たちが言葉を使う時には、常に「そうでないもの」との区別をしながら、その言葉を選んでいるはずなのです。

ところが、まさにそれを私たち一人ひとりが意識していないことによって、様々なコミュニケーションギャップが生じることになります。各々の人が話している言葉の範囲（つまりどこで線を引いているか）が、人によって異なるために話が全くかみ合わず、しかもそのかみ合わない原因がそもそもの言葉の定義の違いによることにすら関係者が気づかないまま進んでいることが多いのです。このコミュニケーションギャップの原因が線引きによるものであることに気づいている人は意外に少ないように見えます。気づいていたら起こらないであろう「言葉の定義への無知問題」はネットやＳＮＳ時代に増幅されているようにも思えます。

例えば「あの人は優しい人だと思う?」という問いに対してのＹＥＳやＮＯの答えは、恐らく人によって異なることがほとんどだと思います。しかしここには大きく二つの認識の差が考えられます。一つ目は「優しい」という言葉のとらえ方（＝定義）で、もう一つはその定義をもとにした事実関係です。二つ目の方は、比較的客観的に把握しやすいぶん、意見の相違を明確にしやすいのですが、たいていの場合、意見の食い違いは前者の「言葉の定義」の方にあるにもかかわらず、それに気づかず会話することで食い違いの原因すら認識せずにどちらが正しいとか間違っているといった話になることが多いようです。

（出典：細谷功『見えないものを見る「抽象の目」　「具体の谷」からの脱出』、二〇二二年、中央公論新社。出題にあたり文章の一部および図を改変・省略した。）